

宮城県気仙沼市文化財調査報告書

塚沢横穴古墳群

昭和 51 年 3 月

気仙沼市教育委員会

塚沢横穴古墳群

気仙沼市教育委員会

序

昨年5月、市内塚沢に横穴古墳群が発見され、県教育委員会及び東北大学歴学部葉山杉夫博士の協力を得て調査の結果、本邦における北限の横穴古墳群であり、学術的にも貴重なものであることが確認されました。

当市では、これを市の史跡に指定し保存することになりましたが、この文化財はわたくし達の祖先が知恵と技術をもって創造し、生活の表現としてつちかってきた貴重な遺産であり、郷土の歴史を知る上にも重要な役割を果すものであります。

本市には、すでに県の指定する文化財や市の指定する文化財のはかにも数多いすぐれた文化財があります。これらは郷土の歴史を知るばかりでなく、わが国の歴史と文化を正しく理解するためにも貴重な資料として欠くことのできないものであり、これを保護し、永く後世に伝えていくことは現代に生きるもののが義務であり、責任であると思います。

市としても有形・無形を問わず、文化財の保護に積極的に取り組み、郷土資料館等の建設や文化財保護思想の普及と調査管理体制の整備等をはかりながら、新しい世代に希望とうるおいを与えるよう努力いたします。

そうした意味から、この調査報告書が今後の文化財保護政策の一助となり、市民の文化財に対する理解がより一層深められるよう期待するものであります。

昭和51年3月

宮城県気仙沼市長 菅原 雅

序

塙沢横穴古墳群は、気仙沼市の中心部から北北西へ約8kmの地点に発見されました。この地域は、かつて気仙沼湾沿岸部と岩手県内陸部とを結ぶ重要な交通路であったと郷土史家にいわれている地域であります。本調査の結果、塙沢地域が交通の要路であるばかりでなく、8～9世紀には中央政府の支配圏にあり、中央の文化がこの地域に導入されていたことが証明されました。従いまして、これを契機に古記録にもない気仙沼地方の古代における政治・経済・文化の様相がすでに発見されている大谷三島古墳群、又は口碑・伝説等と相まって、今後充実させていくものと考えられます。

またこの調査によって、塙沢横穴古墳群が現在における横穴古墳の北限であることも確認されましたので、日本考古学界の研究に大きな貢献をなすものと思われます。

この調査に当っては全面的に宮城県教育庁文化財保護課の指導を仰ぎましたが特に佐々木茂植技術主査からは献身的な御指導をいただきましたし、東北大歯学部の葉山杉夫博士には人骨の鑑定で大変お世話になりました。その他真夏の炎天下に発掘作業に当られた調査員各位・市文化財保護委員・市農林課・気仙沼警察署の方々、そして調査期間中何から何まで御協力いただき御世話いただきました地主菅原辰三郎氏・家主尾形留夫氏・塙沢横穴古墳保存会の皆さんに対し、厚く感謝と敬意を表する次第でございます。

この報告書を刊行するにあたり、今後共この貴重な遺跡が末永く保存されるとともに、本書が多くの方々に活用され、郷土文化の向上に資することが出来ますならば、望外の喜びと存じます。

昭和51年3月

宮城県気仙沼市教育委員会教育長

熊 谷 謙 吾

例　　言

1. 本書は、宮城県気仙沼市字塚沢113の11に所在する群集墳「塚沢横穴古墳群」の発掘調査報告書である。
2. 本書の執筆は、調査団長小野寺清・調査主任佐々木茂楨・調査員三浦百郎・小山正平・芳賀寿幸・遊佐五郎・尾形律行・奥原道樹が分担し、全体の編集は佐々木茂楨が担当した。
3. 人骨については、東北大学歴史部助教授・宮城県遺跡調査指導員篠山杉夫博士の玉稿を頂いた。また、人骨出土状況の実測図は宮城県教育庁文化財保護課小井川和夫技師が作成した。
4. 図版に使用した写真の大部分は、調査員遊佐五郎の撮影したものであり、遺構・遺物の実測図作製は調査員芳賀寿幸があたった。なお、地形測量図の作製にあたっては、気仙沼市農林課佐藤一彦技師をわざらわした。
5. 本書に使用した地形図と空中写真は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図および2万分の1空中写真を複製したものである。（承認番号 昭51東復第80号および昭51東復第122号）

目 次

序	宮城県氣仙沼市長	菅原 雅
序	宮城県氣仙沼市教育委員会教育長	熊谷 謙吾
例言		
本文		
I 塚沢横穴古墳群の位置と環境		1頁
II 調査に至る経過		2
III 調査の概要—各横穴古墳の状況		3
IV 考察		7
1. 横穴古墳群の形態と編年		7
2. 土層観察と出土遺物		7
3. 「特別寄稿」塚沢横穴古墳群出土の人骨について（東北大学助教授葉山杉夫）		8
V 結語—塚沢横穴古墳群をめぐる諸問題		17

挿 図

第1図 塚沢横穴古墳群位置図	19
第2図 塚沢横穴古墳群地形図	20
第3図 横穴古墳の配置	21
第4図 1号墳実測図	22
第5図 1号墳・2号墳実測図	23
第6図 2号墳実測図	23
第7図 4号墳実測図	24
第8図 6号墳実測図	24
第9図 6号墳人骨出土状況実測図	25
第10図 出土遺物実測図	25

図 版

図版1 塚沢横穴古墳群付近空中写真	26
図版2 塚沢横穴古墳群の立地	27
図版3 横穴古墳の状況（その1）	28
図版4 横穴古墳の状況（その2）	29
図版5 横穴古墳および人骨遺物出土状況	30
図版6 出土遺物	31

調査の要項

1. 遺跡の所在地 宮城県気仙沼市字塚沢 113 の 11
2. 調査期間 昭和50年 7月25日～31日
3. 調査横穴数 7基
4. 調査主体 宮城県気仙沼市教育委員会
5. 調査協力 宮城県教育委員会
6. 調査指導 楊山杉夫（東北大学歴史学部助教授・宮城県遺跡調査指導員）
7. 調査組織 塚沢横穴古墳群発掘調査団
調査団長 小野寺 清（気仙沼市教育委員会社会教育課長）
調査主任 佐々木 茂 横（宮城県教育庁文化財保護課技術主査）
調査員 三浦百郎（気仙沼市文化財保護委員長）
小山正平（気仙沼市文化財保護副委員長）
芳賀寿幸（気仙沼高等学校主事）
遊佐五郎（気仙沼市立松岩小学校教諭）
尾形律行（気仙沼市立松岩小学校教諭）
奥原道樹（気仙沼市立鹿折中学校教諭）
庶務村上敏（気仙沼市教育委員会社会教育課主事）
伊藤清文（気仙沼市教育委員会社会教育課主事補）
調査参加者 辻秀人（東北大学大学院学生）
菅原辰三郎（気仙沼市字塚沢）
尾形留夫（" " ）
菅原勇（" " ）
菅原真美（" " ）
加藤金寿郎（" " ）
三浦秀雄（" " ）
尾形武治郎（" " ）
尾形塚志（" " ）
菅原晃（" " ）

I 塚沢横穴古墳群の位置と環境

塚沢横穴古墳群は気仙沼市の中心部から北北西へ約8kmの地にある。旧新月村大字月立に属し、通称八瀬地域の中央部の中八瀬地区である。八瀬地区は国道284号線から北へ10kmで標高563mの八森平山の稜線で岩手県陸前高田市矢作に接し、西部は約2km余で標高672mの君が鼻山とその後継を境にして、同県東磐井郡室根村及び大東町に接している。また東部は標高197mの山腹を越えて早稻谷の山峠を間にはさみ、約2kmを隔てて、北から南へと標高535mの黒沢山・標高429mの大森山・標高365mの二ツ森山・標高348mの鍋越山を連ねる稜線によって旧斐折地区および旧気仙沼地区と境している。

塚沢の山峠の中央低部を八瀬川が北から南へと蛇行して流れ、国道284号線付近で大川に合する。民家はこの流域の両側や支流の沢々に点在し、耕地もまたこの流域に開けている。しかし、全面積の約9割が山林である。

大字月立は、明治8年に新城村と合併する以前は松川・早稻谷・八瀬をもって気仙沼7カ村中の一村であった。この地を通る八瀬街道は、古くから沿岸部と内陸部とを結ぶ交通路で、新月村誌はそれを次のように記している。

同街道の中、追分から松川、早稻谷を経て上八瀬に至る道路は古くから平泉を中心とした東磐井郡方面（東山地方）と気仙沼を結ぶ大切な通路であったといわれ、今尚、上八瀬区の鳥居峠の山道は大原への通路として利用されている。又、関根区からは藤沢（しののさわ）の山越え道があり、往時は岩手県と宮城県をつなぐ主要な道路であったばかりでなく、現在も折壁（室根村）方面への近道として利用する人が多い。

ここでいう往時は必ずしも古墳時代をさしているわけではないが、道路の成り立ちは人の移動や居住の初めにさかのぼることができるもので、交通手段の発達がみられない時期には特に重要性が大きかったであろう。しかも平泉文化以前の段階において、気仙沼や本吉地方の海岸部から胆沢・江刺地方への交通は八瀬～大原（あるいは猿沢・典田）～胆沢・江刺という道が最短距離であったろうことは疑いがない。

このことは、塚沢地区への古墳文化の伝播と展開を考える上で重要であろう。なお、塚沢なる地名は、今回調査した古墳群の対岸上流約200mにある「古塚」に由来するものといわれている。

II 調査に至る経過

1 発見の動機

塙沢横穴古墳群を発見するにいたった動機は、昭和46年、尾形留夫氏が気仙沼市字塙沢113の11番地内（菅原辰三郎氏所有地）に居宅を新築するために、裏の崖斜面をブルドーザーで削平して宅地を造成中のことであった。この折に1箇所（現在の1号墳）に穴があいたのである。尾形氏宅では以来数年の間にこれを横穴古墳とは知らずに、野菜の貯蔵穴として使用してきた。

ところが昭和50年3月に、1号墳の西の崖斜面で更に新しく2箇所の穴（今回の4号墳と6号墳）が見つかり、しかもその1箇所の穴内（今回の6号墳）に入骨が埋葬されていることを確認した。

このことは地元の尾形多志雄氏から気仙沼市文化財保護委員小山正平氏を通じて、5月7日には気仙沼市教育委員会事務局に報告された。

2 第一次予備調査

昭和50年5月14日、気仙沼市教育委員会社会教育課長小野寺清・同社会教育課主事村上敏・主事補伊藤清文らが現地に赴いて調査したところ、埋葬施設とその人骨ではないかと判断し、気仙沼市教育委員会は人骨の取扱いにつき気仙沼警察署に通報するとともに、宮城県教育庁文化財保護課に指示を求めた。

5月23日、宮城県教育庁文化財保護課佐々木茂植技術主査および気仙沼警察署金野刑事課長、気仙沼市教育委員会小野寺社会教育課長らが合同の予備調査を現地で行ない、種々の点で、これら3箇所の穴が横穴古墳と呼ばれる後期古墳時代の埋葬施設の可能性が大きいこと。従って人骨も古代の可能性が濃いこと等が話し合われるとともに、とりあえず人骨鑑定を中心とした予備調査と現状の保護保存をはかることになった。

3 第二次予備調査

6月3日、宮城県教育庁文化財保護課の千葉与一郎課長・齊藤良治調査第二係長・小井川和夫技師が現地に出向し、翌4日には人骨鑑定のために東北大学歯学部薦山杉夫博士（宮城県遺跡調査指導委員）も訪れて、両日にわたりて予備調査を行なった。

この段階では、問題の人骨が薦山博士から古墳時代の人骨であるとの判断が示された点が特に重要であり、この結果、今後の問題は文化財保護の観点から措置していく方針が打出された。

4 発掘調査の実施

かくして、塙沢地区で発見された3箇所の穴は、にわかにわが国最北限の横穴古墳である可能性がでてきた。気仙沼市教育委員会では、予備調査の結果を菅原雅市長に報告し、宮城県教育厅文化財保護課とも協議した結果、市教育委員会を主体とする発掘調査を実施することになった。

本調査は、遺跡の全域を可能な限り発掘して塙沢地区における古墳文化の一端を明らかにするとともに、遺構の保護保存の学術資料を得ることを目的に、昭和50年7月25日から約7日間の予定で実施した。その組織は調査の要項にかけたとおりである。その後若干の補足調査もふくめ、9月1日～2日の両日にわたって埋戻し作業を行い全日程を終了した。この間、7月31日には調査成果について報道関係者に発表するとともに、午後からは地元市民および隣接市町村民を対象として現地説明会を開催し、発掘調査の成果および塙沢横穴古墳群の学術的価値と保存の意義について普及につとめた。

なお、その後、調査の成果をふまえて、地元に塙沢横穴古墳保存会がつくられるとともに、土地所有者菅原辰三郎氏や家主尾形留夫氏の遺跡に対する御理解により、発掘調査を実施した7基の横穴古墳全体が現状のまま保存されることになり、気仙沼市教育委員会は昭和50年9月17日、塙沢横穴古墳群を市の史跡に指定した。

III 調査の概要—各横穴古墳の状況

塙沢横穴古墳群の調査は昭和50年7月25日より開始した。尾形留夫氏の家屋が横穴古墳群の造られている崖斜面を大きく削り取って建っており、しかも家屋と横穴古墳との距離がせいぜい1ヵ内外と近接していること、水道管等の埋設があること等々の諸点より発掘区は大きな制約を受けざるを得なかった。

この現状下において設定した発掘区の面積は約40坪程度であり、この区域内に都合7基の横穴古墳が確認された。そのうち玄室内まで検査したのが4基で、残る3基は本調査ができなかった。横穴古墳には東から西へと順に1号墳・2号墳……7号墳と番号を付した。

もちろん横穴古墳の数は、上に述べたように制約された発掘区内のものであることは言うまでもない。したがって、1号墳の左側へ続く傾斜面および4号墳と5号墳の間に横穴古墳があるのかどうかの確認はできなかったが、その立地の状況からみて、調査区域外にも続く可能性がある。

1号墳（第4図、図版3）

本横穴古墳群発見の端緒となった横穴である。工事や落盤等による天井部や側壁等の崩壊がひどく、岩塊や土砂が玄室内に多く流入していた。

最上層には砂岩塊の崩壊土があり、その下に木の葉等を混えた擾乱層がある。その下に黒色の自然堆積層が厚く残っていたが、この土層は玄室の入口部分まで続いている。この自然堆積層を除くと下に暗褐色土層および茶褐色土層の2層の堆積層がみられる。上層の暗褐色土層は厚さ14~18cm、その下層の茶褐色土層は厚さが7~10cm程度ある。暗褐色土は玄室の入口から奥へ3分の2程度までが厚く、奥壁に近い程薄いのに対し、最下層の茶褐色土層は奥壁に近い所ほど厚く残っていた。この下は床面である。ところで、この2つの土層は遺物包含層で暗褐色土層中からは須恵器の壺が、また下層の茶褐色土層中からは須恵器の甕の体部破片が2点出土している（第10図・図版6）。玄室床面は奥壁に近いほど低い。

玄室は本横穴古墳の中で最も規模が大きい。縱長の長方形で、中心軸の左右にはほぼ対称のプランを示す。中心軸の方向はほぼ東西である。玄室の奥行4m40cm、幅2m50cm、高さ1m70cmを算する。立面形はアーチ形をなしているが、天井壁と側壁との境ではなく、また床面には台床施設がみられない。

玄門部や羨道部は天井・側壁とともに崩落している。ただし、はたして当初から玄門部や羨道部がなかったのかどうかは、民家が近接していて大きな制約をもった発掘区の状況やひどい崩落の状況からみて残念ながら確認ができない。

本横穴古墳で最も興味深いのは、2号墳の右側壁がこの1号墳の玄室内床面に入りこんで河原石と祐土混りの積土とで積み上げて造ったと観察されることである。

2号墳（第5・6図、図版3）

予備調査の時に存在が知られた1号墳と4号墳の中間に発見されたもので、1号墳と主軸が交叉するように、ほぼ真南に開口する。

玄室の平面プランは不整な円形を呈し、奥行は1m70cm、幅2m10cm、高さ1m20cmを測る。入口部分は玄室よりせばまりを見せ、その長さは右側壁で1m60cm程である。天井部はほとんど崩落てしまっているが、奥壁との立面形はドーム形を呈するようである。出土遺物はない。

本横穴は、1号墳や3号墳において追葬も行なわれなくなり、その存在が忘れられてしまつた段階において造成されたと考えられる。すなわち、この2号墳を造営する時点では1号墳が開口してしまったために右側壁を積石と積土によって1号墳玄室に入りこんでL字形状に構築しており、それが1号墳玄門部分をふさぐように観察される。さらに本横穴の造成は西隣3号墳の天井部をも落盤させたため3号墳を石で埋め、その上に小口積みの積石と積土で左側壁を構

築している。玄室床面は凹凸がはげしい。

3号墳（第7図、図版4）

2号墳と4号墳の中間に位置し、レベルが一段と低い。2号墳と4号墳の床面を精査するうちにその存在が確認された。

おそらく2号墳か4号墳を造る際に本横穴の天井部が落盤したので、この横穴を埋める必要が生じたのであろう。床面から石積し、上の方は丁寧に小口積みにして更に積土も行ない、2号墳と4号墳を境する側壁を築いている。立地の状況から全面発掘を行はず、規模や形態は不明である。

4号墳（第7図、図版4）

この横穴も、1号墳と同様に、予備調査の段階で存在が確認されていた。調査した横穴の中では最も高位に位置し、ほぼ南南西に開口している。

玄室の平面形は不整な長楕円形を呈する。奥行2m60cmの規模である。天井部はほとんど崩壊してしまっているが、奥壁との立面形はドーム形をなすようである。

本横穴は、造成のとき3号墳の天井部分を削平したために、3号墳を石で埋め、その上に小口積の積石と粘土混りの積土で右側壁を構築している。右側壁は若干せばまってくびれをみせていて、これが玄門部にあたると考えられるが、必ずしも明確でない。床面は凹凸が激しく、右側中央部分には、3号墳天井部の輪郭が検出された。出土遺物はない。

5号墳（第8図、図版5）

6号墳を調査中にその玄室外右側壁に開口して、存在が確認された横穴である。開口部に石積がみられたが、すぐ近くに民家があつて発掘区域は大きな制約を受けたため、石積みが5号墳のものか確認できなかった。規模や形態・主軸方向などは不明である。遺物も確認していない。

6号墳（第8図、図版5）

調査区域内では、西側端部に位置する。ほぼ南方向に開口している。昭和50年3月に人骨が発見された（第9図）。玄室入口部の天井が崩落しており、また床面が前方で一部削られている以外は遺存の状況が良い。玄室の平面形は不整な長楕円形を呈している。

奥行は床面で3m55cm・天井部で2m8cmある。玄室の最大幅1m86cmで、最大高は1m15cmである。玄室立面形はドーム形で、床面は凹凸が多く、左奥壁寄りに大きな落ち込みがあるほか、左半分には大小のくぼみがいくつかみられる。右側壁寄りに床面より約20cm程高くなつた台床式施設が造られている。玄室の堆積土層のみで、岩盤が崩壊したと思われる岩塊を多量に含むもので流入土と判断されるが、擾乱されたような状況はみられない。玄室のほぼ中央部を奥壁の落ち込みから外部へ走る溝が検出された。

玄室入口部での幅は平均40cm程度で、かなり整然としたものである。閉塞施設はみられない。

6号墳からは、次のような遺物が出土しているが（第10図、図版5・6），その出土状況はすべて玄室の堆積土層中の奥壁寄り1m以内の範囲内である。

土師器

内面が黒色処理された壺の、体部下端に近い破片が1点出土した。ロクロにより成形されているが、底面は剥落しているために判然としない。

須恵器

3点出土した。1点は壺形土器で底部を欠く。色調は灰色である。ロクロ成形の痕が内外面にみられる。他の2点は甕の体部破片である。

刀装具

鍔と柄の先端部の間にに入る金具で、鍍金されている。銹化がかなり進んでいる。

刀子

刀身の大部分と基部の先端を欠いている。刀身は平背で三角形状の小刀であり、銹化がひどい。現存部の長さ7.5cm、刃幅1.7cmを測る。

鉄鏃

3点出土した。長さはそれぞれ約7.5cm・8cm・11cmである。すべてが欠損しているが、先端が残っているものが2点あり有茎である。また、根の部分が残っているのが1点あり、先端が尖った棒状になっている。いずれも銹化がかなり進んでいる。

人骨

昭和50年の予備調査で発見されたもので、後に述べる。

7号墳（第8図、図版4）

6号墳の西側に発見された横穴であり、本横穴群中では3号墳とともに、最も下段に位置する。玄室入口天井部を発見してその存在を確認したのみで、発掘区域の制約を受け内部調査は行っていない。

各横穴古墳の状況と出土遺物一覧表

（単位cm）

横穴 番号	玄 室					出 土 遺 物	備 考
	奥 行	巾	高 さ	立 面 形	台 床		
1号墳	440	250	170	アーチ	なし	須恵器壺・甕片	
2号墳	170	210	120	ドーム	なし		
3号墳							一部調査
4号墳	260	142	114	ドーム	なし		
5号墳							一部調査
6号墳	355	186	115	ドーム	有	人骨・土師器壺片・須恵器甕・壺・甕片 刀装具・刀子・鉄鏃	
7号墳							一部調査

※ 調査できたのは玄室だけである。

IV 考 察

1. 横穴古墳群の形態と編年

制約を大きくうけた発掘区域内でともかくも玄室内まで調査できたのは、1号墳・2号墳・4号墳・6号墳の4基であり、3号墳・5号墳・7号墳は存在を確認したが、1部分の調査にとどめざるを得なかった。

いま、その形態と編年を考えてみると、まず、玄門や羨道、それに前庭部を確実に追求できるものはなかった。ただし、玄門部は4号墳で1部みられる。本来的にすべてが玄門・羨道・前庭部をもたないものかどうかは現状ではいえない。

編年では、1～4号墳についていって、1号墳と3号墳が2号墳および4号墳より古い可能性が大きい。なぜならば、1号墳の玄門部に2号墳の右側壁を積石と積土とで造っていると観察されること。また2号墳および4号墳造営の際に3号墳の天井部を破壊していること等々よりである。従って、これらのこととは、1号墳と3号墳がつくられて相当の年月を経過した後に、2号墳と4号墳がつくられたことを推察させる。

中心軸線の方向は、1号墳が東西、2～4号墳は南北である。また5～7号墳では、立地の状況や道構の切合から観察して、7号墳か5号墳の次に6号墳の編年が考えられると思う。

2. 土層観察と出土遺物

今回の調査で確実に年代の推定できる遺物はきわめて少ない。ただし、1号墳出土の須恵器壺や6号墳出土の内黒ロクロ成形土師器の壺等は、一応9世紀と考えられるから、1号墳や6号墳は9世紀の使用が認められるだろう。だが、もちろん、これらは横穴の成立時期までも示すものとは限らない。この点で興味があるのは、1号墳の流入土である。すなわち、1号墳の流入土と堆積土の一部（上層の暗褐色土層）とは2号墳の流入土を切っているという事実である。このことから2号墳より新しい時期での追跡が1号墳で行われたことが考えられる。

さらに、2号墳の右側壁が1号墳の本来的には、玄門部の閉塞部分をこわしてつくられること。9世紀とみられる須恵器壺の下に茶褐色土層よりなる層位があって、青海波文のタタキを有する壺体部片が出されているが、これは8世紀にさかのばる可能性があること。これらのことからみると、例えば1号墳などは8世紀に造成され引き続き9世紀にも使用されたものではなかったかと考えられる。

3. 特別寄稿 塚沢横穴古墳群出土の人骨について

葉 山 杉 夫

1975年6月4日、気仙沼市字塚沢から横穴古墳群と考えられる横穴から一個体分の人骨が出土した。この人骨は流出土などによる散乱状態で出土したが、その流出土などによる散乱状態あるいは人骨の形状から同一個体のものであり、しかも現代人にはみられないいくつかの形態学的特徴をもつ、未成年の男性の一個体分の人骨であることが認められた。その後の考古学的な詳細な調査から、日本列島の最北限に位置する横穴古墳群であることが認められた。この人骨は考古学的調査がなされた1号墳から7号墳までのなかの横穴古墳群の西側に位置する6号墳玄室内より出土したものである。宮城県の仙北地方ではこのほかに装飾横穴古墳としては最北限の山畠横穴古墳群、青山・混内山横穴古墳群（萬山、1973, 1975）などから相当量の人骨が出土しているが、これらは再埋葬されており個体別には観察ができなかった。塚沢横穴古墳群6号玄室内人骨は流出土などによる自然散乱状態で出土したものではあるが、同一個体のものであり、しかも最北限の横穴古墳群という観点からも未成年ではあるが貴重な資料である。この出土人骨についての出土状態ならびに人骨について所見の概要を報告する。

本報告を記するにあたり、数々のご高配およびお世話頂いた気仙沼市長、気仙沼市教育委員会、菅原辰三郎氏らの多くの地元の皆さま方ならびに宮城県教育委員会文化財保護課の多くの皆さま方のご協力を頂いたことを記し謝意を表します。

出土状態

塚沢横穴古墳群のなかの6号墳玄室内のほぼ中央に埋葬されていたことが推定できる一個体分の頭骨と四肢骨が散乱の状態で出土している（小井川和夫技師作成の実測図參照）。この散乱の原因は玄室天井一部・岩盤の落盤および玄門附近からの流入土などにより、頭骨および四肢骨の一部が玄室奥方向へ押し流れたものと断定することができる。体幹を構成している骨の多くは泥土化あるいは消失している。僅かに残っている体幹の骨の一部の状態は埋葬時の位置にあることが推定できる。この残った僅かな体幹の状態から推して頭部を玄室奥北西方向にして、体軸は玄門右側の東南方向を向いて埋葬されている。また埋葬は深い右側臥位の状態を推定することができる。横穴古墳群出土人骨にしばしばみられる再埋葬などによる人為的な骨の移動は考えられない。出土した骨の保存状態は各部で風化の進行状態はまちまちでいちような保存状態ではないが、骨の各部に共通しているのは玄室床面に接した部分はとくに風化が進んでいる。頭骨は玄室北西奥に頭蓋底を床面にしてころがりこむ状態、左右の胫骨は玄室中央奥へ流入土により押し流れた状態、他の下肢骨も同じような傾向で玄室奥方向へ流れた状態で

散乱している。下肢骨は保存されている骨のなかでは比較的保存状態は良好なものが多い、自由下肢骨では大腿骨、下腿骨とも右側の保存状態は良好で、左側の下肢骨は右側に比べ風化が進み破損消失部分がかなり多い。足根骨の一部は残っているが、中足骨、趾骨は消失している。上肢骨は下肢骨に比して保存状態が悪く骨は部分的に残っているのがその殆んどであり、上肢骨で完形に近く保存されていたのは右尺骨のみである。手根骨、中足骨、指骨は消失している。

頭骨の観察ならびに計測値

頭骨は全般に風化が進み脆弱である。玄室床面に接した頭蓋底はとくに風化が進行している。脛頭骨と顔面頭骨の接続部の多くは消失しており、かろうじて接続している状態である。左右の頬骨弓、左側頭骨騎状部の一部および、左右の乳様突起部なども消失している。下頸骨では床面に接した下頸枝部の消失が著しい。下頸体の保存状態は比較的よい。

頭骨の主な計測値および示数は第一表に示した。

第一表 頭骨計測値および示数

(1) 脳頭骨		(2) 顔面頭骨			
項	目	数 値	項	目	数 値
1.	頭骨最大長	174	44.	両眼窩幅	(101)
8.	頭骨最大幅	140	46.	中顎幅	107
9.	最小前頭幅	97	48.	上顎高	66
10.	最大前頭幅	119	51.	眼窩幅(左)	42
11.	両耳幅	122	52.	眼窩高(左)	36
12.	最大後頭幅	111	54.	鼻幅	(26)
13.	基底幅	(103)	55.	鼻高	51
20.	耳ブレグマ高	112	48 : 46上顎示数	61.68	
23.	頭骨水平周	(507)	52 : 51眼窩示数(左)	85.71	
26.	前頭弧長	123	54 : 55鼻示数	50.98	
27.	頭頂弧長	135	a 鼻根幅	23	
8 : 1	頭骨長幅示数	80.46	b 鼻根横弧長	25	
20 : 1	長耳高示数	64.37	a : b 鼻根弯曲示数	92.00	
20 : 8	幅耳高示数	87.14			
9 : 10	横前頭示数	85.71			
9 : 8	横前頭頂示数	68.57			

(註) ① カッコの数値は推定値

② 各項目の数値は martin による

脳頭蓋の上面観は楔形に近い類卵形で、頭骨最大長は縄文時代人（鈴木、1963・池田・茂原、1975）東北現代人（山崎ほか、1967）よりも小さい。頭骨最大幅140（推定）は縄文時代人よりも小さく、東北現代人よりもやや大きい。頭骨長幅示数は80.46で、中頭型に近い短頭型で、頸骨弓は消失しているが軽いフェノチギーであったことを推定することができる。主要三縫合の縫合は簡単で、縫合間に瘤はない。左一個の頭頂孔附近からは後頭部へ回ってゆるやかな傾斜をなしている。側面観では前頭部がわずかに膨隆している。頭頂の平坦部は小さく、ゆるやかな弧を描き後頭部へ移行している。上、下の側頭線の発達は弱い。ブテリオン部はヒトの正常型に属する。外耳孔は長楕円形で長軸は脳頭骨に対してほぼ垂直、耳ブレグマ高は112で長耳高示数64.37、幅耳高示数は87.14といずれも東北現代人よりも大きい。後面観の全体観では砲弾形に近く、人字縫合では左右両側のそれぞれ中央附近に示指頭大、右に小指頭大の縫合骨が存在する。

顔面（正面）観では顔面頭骨は脳頭骨に比べてやや小さい。上顎示数（ウィルヒヨウ）は61.68の過低型、眉間隆起は僅かに認められる。左は浅く、右はやや深い前頭切痕が存在する。左右に針頭大の小さな前頭孔が開孔。鼻骨の鼻根は甚だ低く、鼻根弯曲示数（鈴木、1963）は92.00とであるから、未成年ではあるが横穴古墳人の典型的鼻型、顔型、また鼻示数は50.98となり鼻中型にまつとも近い鼻低型で、古墳時代人の平均に近い。眼窩口は鈍円四辺形で眼窩示数は85.71と眼窓中高に近い眼窓高型である。犬歯窩は浅いが存在する。

下顎骨は下顎体は完形に近いが、下顎枝の部分では消失部分が多い。

下顎体は前半部前齒部では骨質厚く頑丈で高いが、下顎底は後方向下顎枝に向うにしたがい低く骨質も薄くなり、下顎角は消失しているが殆んど突出はなく丸みを帯びて下顎枝へ移行している。オトガイ隆起はやや強く、オトガイ結節の発達は著明、オトガイ三角も比較的よく発達しており、keiterのオトガイ三角の分類ではⅢ型に属する。オトガイ孔は一対、とともに第一小白歯と第二小白歯の間の歯槽縦と下顎底とのほぼ中央に位置する壮年型である。オトガイ孔は下顎枝の後上方に向って開孔している。下顎体の舌側面ではオトガイ棘は一対、発達著明、二腹筋嵩は示指頭大でかなり明瞭で深い。下顎枝は突起部は消失しているが広さは中等度で高さはかなり低いことが推定できる。下顎底切線と下顎枝後縁切線のなす下顎枝の角度は推定135度とかなり広く幼若型というより、頑丈な下顎体前部との関係から推して異常な虚弱性を呈する。下顎角は外側への突出ではなく、咬筋粗面ならびに翼突筋粗面の発達も弱い。

歯は上、下顎歯槽骨に釘植されている歯の保存状態は一部の歯冠に破損が認められるが、概して良好な保存状態である。上顎の右側切歯、左第二大臼歯、下顎では右側切歯の歯冠部と左第二大臼歯は破損あるいは消失しているが、消失している歯の歯槽部は開放している。上、下顎ともに第三大臼歯の萌出はなく、X線写真像の観察結果からいずれも歯槽部に歯胚の形成は

ない。縄文時代人では第三大臼歯すなわち智歯の萌出は81%に認められ、古墳時代人では全智歯萌出は62.7%（鈴木、1963）で、現代人の36%にくらべればかなり多いが、智歯の萌出のないことは充分考えられる。

歯列弓は上顎は橢円形、下顎骨で橢円形で一般型に属する。歯の咬耗は各歯部、左右ともいちようではなく、Brocaの歯の咬耗度の分類では上、下顎切歯、犬歯など前歯部では一部の象牙質の露出しているBrocaの2度、右臼歯群は1度から2度、左臼歯群は右に比べ咬耗度は軽く0度または1度。保存されている歯にカリエスはない。上、下顎歯の咬合形式は軽い鉗子状咬合の咬合形態を呈するのに対して、古墳時代人では73.9%（鈴木、1963）とかなり減少しているが、その多くは歯の切端の咬合形式を成している。左右中切歯唇側面の近・遠心辺縁隆線は隆起し、その結果中央が陥んだ形状を呈する複シヤベル切歯型を形成している。それに対応するかのごとく舌側近・遠心辺縁隆線の発達が著明に隆起し、その結果舌側面が陥んだ形状を呈し、日本人種などの黄色人種（モンゴロイド）に出現頻度の高いいわゆるシヤベル切歯型の特徴をもつ、この特徴は右中切歯でとくに著明に現れている。

頭骨以外の骨について

体幹はその多くが泥土化あるいは消失していない。保存されていた体幹骨はわずかの肋骨破片、椎骨破片と耳状面附近の破損した仙骨のみである。上肢骨も風化が進み保存されている部分も多い。上肢帯では左肩甲骨線の一部のみであとは消失している。上腕骨では左は消失、右上腕骨の骨体と遠位部の一部が保存されている。前腕の骨では撲骨は左右とともに骨体の一部のみ、尺骨では右ではほぼ完形に近く、左尺骨は近位端、骨体の一部が保存されているが風化が進んでいる。指骨部はすべて消失している。下肢骨とくに大腿骨、下腿骨は頭骨、上肢および体幹骨に比して保存状態が比較的良好でとくに、腓骨をのぞく右側の下肢骨はいくつかの項目について観察および計測が可能な状態である。

下肢骨のうちの下肢帯で保存されていたのは右寛骨の腸骨、坐骨、恥骨の一部、および左寛骨では完形な閉鎖孔を含む恥骨と坐骨の一部であった。これらの寛骨の形状から、男性の人骨でありまた左恥骨結合面から恥骨結合面の年令変化（埴原、1952）で17～18才および右腸骨核骨核成熟表示（杉浦、中沢、1963）でⅦ～Ⅷ型に相当、右坐骨結合面骨核成熟表示（杉浦・中沢、1963）ではⅣ～Ⅴ型に相当し、これらの寛骨の所見を総合すると17～18才前後の男性の人骨と考えられる。

自由下肢骨のうち、保存状態の比較的良好な右大腿骨と胫骨および左腓骨の主な計測値および示数を第二表に示した。

第二表 自由下肢骨の計測値および示数

(1) 大腿骨(右)

項目	数 値	項目	数 値
1. 最大長	423	1. 全長	345
2. 自然位全長	421	8. 中央最大径	27
3. 最大転張	406	9. 中央横径	21
4. 自然位転張	401	8a. 栄養孔部矢状径	32
5. 中央矢状径	28	9a. 栄養孔部横径	24
6. 中央横径	25	10b. 最小周	75
7. 中央周径	85	10b:1. 長厚示数	21.74
8. 上部横径	32	9:8. 中央横断示数	77.78
9. 上部矢状径	28	9a:8b. 栄養孔位横断示数	75.00
10. 長厚示数	20.19		
6+7:2 穎丈示数	12.83	(3) 胫骨(右)	
6:7 中央横断示数	11.20	1. 最大数	344
10:9 上部横断示数	8.750		

左右の大腿骨はともに大腿骨頭、転子などに破損消失部分があり、胫骨では骨体部に破損消失部分が多い。右腓骨では骨体中央部より遠位端部は消失している。左右の足根骨の一部が保存するほかは中足骨、趾骨などはいずれも消失している。

大腿骨は左右とも頑丈な形状で、近位部の骨頭、大小両転子などはかなりの発達が推定できる。殿筋粗面も粗造な隆起を形成している。近位、遠位の骨端線はすべて化骨は完了している。最大長は423は宮城県内横穴古墳群人骨(葉山, 1973, 1975)から比べるとやや小さいが、古墳時代人(城, 1938・平本, 1972)以外の縄文時代初期に至る各時代のどの平均値よりも大きい。古墳時代人の変異値としては小さい。長厚示数は20.19で現代人19.6よりも大きく、古墳時代人(城, 1938)にはほぼ一致する。頑丈示数も古墳時代人のそれとほぼ一致している。長厚示数、頑丈示数とも縄文時代人よりも小さく、現代人よりも大きくその中間型と考えられる。骨体中央横断示数の11.20は、古墳時代人の10.23よりはかなり大きい広型であるが、古墳時代人の変異値(120.8-85.2)と比べるとその変異は小さく、縄文時代人の平均値よりはやや小さいがこれに近い。上部横断示数の8.75は古墳時代人の平均値98.6よりかなり小さい。古墳時代人の上部横断示数の平均値は日本人のどの各時代人に比べてとび抜けて大きい。

塚沢横穴人骨の上部横断示数は現代人、縄文時代人の平均値に近い。大腿骨後面の粗線は内、外側唇の発達も比較的よく隆起もかなりあり、柱状性(Plaster)も縄文時代人ほどではないがかなり強い。

胫骨全長は日本人の各時代の平均値よりも大きく、縄文時代人の平均値に近い。中央横径は各時代人ともに大きな変化はみられないが、それらの平均値に近い。古墳時代人の中央最大径はいずれの時代人よりも小さいが、塚沢横穴古墳人骨は古墳時代人の平均値に近い。栄養孔矢状径、横径とともに古墳時代人をはじめ各時代の平均値にはほぼ一致している。中央横断示数の77.78は古墳時代人の平均値よりも大きいが、その差は小さく扁平性は強くなく広型。栄養孔位横断示数の75.0は古墳時代人の平均値69.8より大きく、また日本の各時代人平均よりも大きい。これは中央横断面とはほぼ同じ傾向を示し、広型で扁平性は強くない。胫骨後面のヒラメ筋線の一部は示指頭大に膨隆し、下端部は縁構造に突出する。

右大腿骨をTrotter and Gieserの推定式から身長算出すると163.5となる。

ま と め

日本列島の横穴古墳群としては最北限の宮城県氣仙沼市字塚沢地区から出土した6号墳玄室内人骨は頭骨以外の骨を含めて、その出土状態および骨の形状から同一個体の人骨と推定した。出土した人骨のうちの体幹骨は保存状態が悪くその多くは風化あるいは泥化していたが、埋葬時の頭方向を玄室奥北西方向に向け下肢部を玄門東南方向に向けた状態で保存されていた。保存されていた頭骨および四肢骨のうち比較的保存状態の良好であった下肢骨から17才から18才前後の男性の人骨であることを推定することができる。この塚沢横穴古墳6号玄室内人骨は壮年あるいは熟年ではないので日本の各時代の壮年あるいは熟年の形状あるいは計測値およびその示数などと直接比較することは危険ではあり、若干の問題点は今後の課題となるが、しかしながらそれをも考慮しても、頭骨については鈴木、1963年の「日本人の骨」との比較、また下肢骨については城、1938年の「古墳時代日本人骨の人類学的研究」および平本、1972年の「縄文時代から現代に至る関東地方人身長の変化」などの比較検討からはこの若年男性の塚沢横穴古墳6号人骨の形状および数値の傾向は古墳時代人の形状および計測値ならびに示数に近い傾向を示すものと考える。

結 語

塚沢横穴古墳6号墳出土人骨は後期古墳時代人のいくつかの特徴をもつと結論する。

主な参考文献

- (1) 葉山杉夫・1973；人骨に関する所見「山畠装飾横穴古墳群発掘調査概報」宮城県教育委員会・宮城県。
- (2) 葉山杉夫・1975；人骨に関する所見「青山・混内山横穴古墳群」宮城県三本木町文化財調査報告書第3集・宮城県三本木町。
- (3) 鈴木尚・1963；日本人の骨・岩波書店・東京。
- (4) 山崎正文ほか・1967；東北日本人頭蓋の人類学的研究・人類書・75巻2号。
- (5) 塙原和郎・1952；日本人男性恥骨の年令的変化・人類誌・62巻。
- (6) 杉浦保夫・中沢修・1963；骨格年令・中外社・東京。
- (7) 城一郎・1938；古墳時代日本人人骨の人類学的研究・第3部下肢骨・人類学概報・1；245-324。
- (8) 池田次郎・茂原信生・1975；青島貝塚の縄文人骨について・南方町史・宮城県南方町。
- (9) 平本嘉助・1972；縄文時代から現代に至る関東地方人身長の時代的変化・人類誌・80巻3号・221-236。



前面観



側面観



上面観



後面観



下顎骨上面観



左下顎骨側面観

自由下肢骨



右腓骨

右胫骨

右大腿骨

左大腿骨

左胫骨

左腓骨

写真 2

V 結語—塚沢横穴古墳群をめぐる諸問題

本調査の結果をまとめると

- イ. 砂岩質の崖傾斜面につくられていること。
- ロ. 群集して造られていること。
- ハ. 造営されたものがアーチ形やドーム形の玄室や玄門部、それに閉塞部分をもつものであること。
- ニ. 土師器・須恵器・鉄製品等の古代の遺物を埋納していること。
- ホ. 古代の人骨を埋納していること。

等々であり、これらの事実は、調査したところの人工の埋葬施設が古墳時代後期の横穴古墳群であることを立証するものである。

八瀬川の一小支谷をはさんで、塚沢丘陵につくられた横穴古墳群は、調査した区域である塚沢113の11番地内で7基のほか、八瀬川をはさんで西方へ約200mの東斜面、塚沢175番地内にも数基以上があり、これだけでも10基以上になる。これらの立地の状況等からみて、調査区域外にも続く可能性は大きく、今後の綿密な分布調査によって、その数はおそらく数10基に達するのではないかと予想される。

この気仙沼・本吉地方の古墳文化の遺産として從来著名なものは、本吉町三島に所在する大谷三島古墳群とその出土品である。現在は、大谷海岸を望む台地上に7基の円墳を数えるにすぎない。ここからは、かつてメノウ製勾玉14点・碧玉岩製勾玉1点・碧玉岩製管玉2点・水晶製切子玉5点・ガラス製小玉26点などの50点におよぶ玉類等が出土している。

塚沢横穴古墳群は、この大谷三島古墳群の北北西へ約16.3kmも古墳文化の遺産を北方へおしあげたのである。

さて、從来の横穴古墳群の分布の北限として認められていたのは、宮城県北部の迫川流域地方であった。

すなわち、栗原郡金成町姉齒横穴群や同郡若柳町上畠岡大立横穴群、それに登米郡石越町山根前横穴群を結ぶ線である。これらは、内陸部の山道方面に限って知られているだけであって、海岸部の海道方面は昭和38年に発見された桃生郡北上町月浜地区でのものが報告されているにすぎない。

そこに今回の気仙沼市塚沢横穴古墳群の発見であるから、これはわが国の後期古墳文化の研究に大きな開拓を与えるものとして意義深いといわねばならない。まさに、太平洋沿岸の北限に位置し、緯度の高さからいって迫川流域をしのいで、わが国横穴古墳の最北限をなすもので

ある。

われわれは、調査結果からみてこの塚沢横穴古墳群の成立は8世紀に遡る可能性があり、展開を9世紀とみている。何故にこれらのいわゆる奈良～平安時代の時期にこの塚沢地区に集中的に横穴古墳群が造営されたのであったか。その政治的・経済的・文化的な導入経路や背景などを考察することは、今後の解明がまたれる大きな課題である。

だが、すでに前にも述べたように、この塚沢横穴古墳群の南南東163Kmの地には高塚からなるものだが大谷三島古墳群があって、氣仙沼・本吉地方への古墳文化の伝播流入の事実をあとづけうこと、さらに塚沢横穴古墳群が展開している一小谷の八瀬川に沿う道が、古来氣仙沼方面の海岸地方から、岩手県の胆沢・江刺方面さらに平泉方面へと通ずる幹線道路であったことは塚沢横穴古墳群の成立や展開を考えるうえで、まことに関心をひくことではないだろうか。

宮城県北部の主要横穴古墳群

※印は報告書が刊行されているもの

志田郡松山町	亀井団横穴古墳群
志田郡鹿島台町	大迫・ハツ穴横穴古墳群
志田郡三木町	巣山畠横穴古墳群(装飾横穴として国の史跡)
遠田郡涌谷町	巣追戸・中野横穴古墳群
遠田郡田尻町	大沢横穴古墳群
古川市	朽木橋横穴古墳群
玉造郡岩出山町	巣川北横穴古墳群
加美郡官崎町	巣米泉館山横穴古墳群
栗原郡金成町	姉歯横穴古墳群
栗原郡一迫町	川口横穴古墳群
栗原郡若柳町	巣烟岡大立横穴古墳群
登米郡石越町	巣山根前横穴古墳群
気仙沼市	巣塚沢横穴古墳群

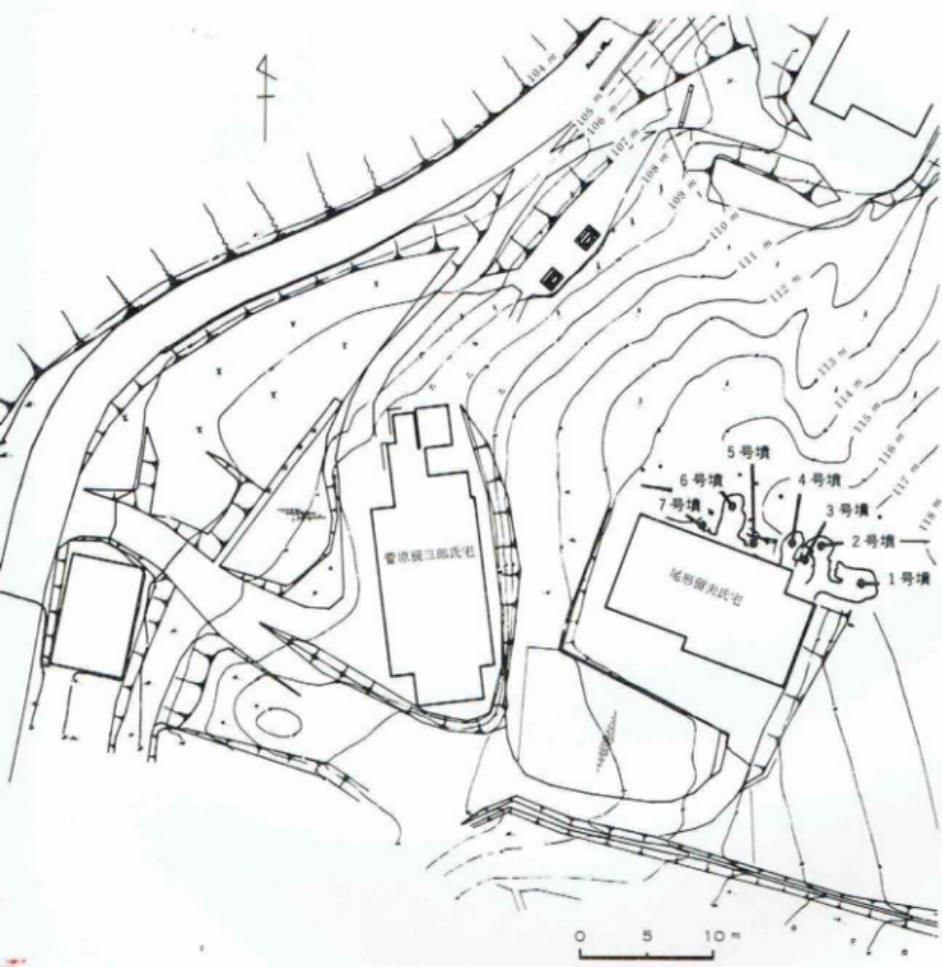
挿 図



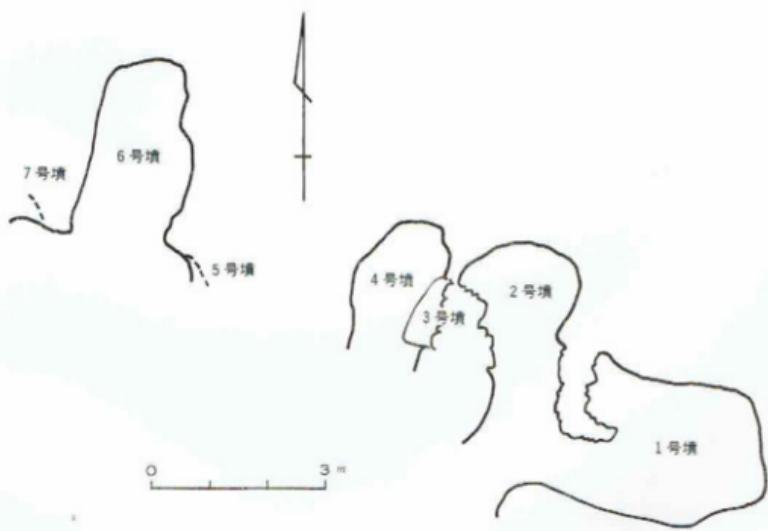
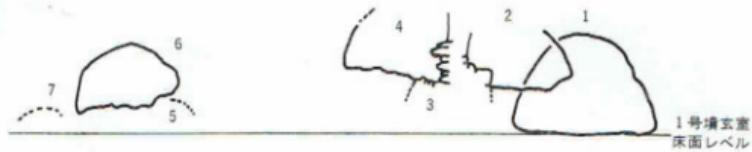
第1図 塚沢横穴古墳群位図

国土地理院発行「気仙沼」(5万分の1) 承認番号昭和51、東復第80号

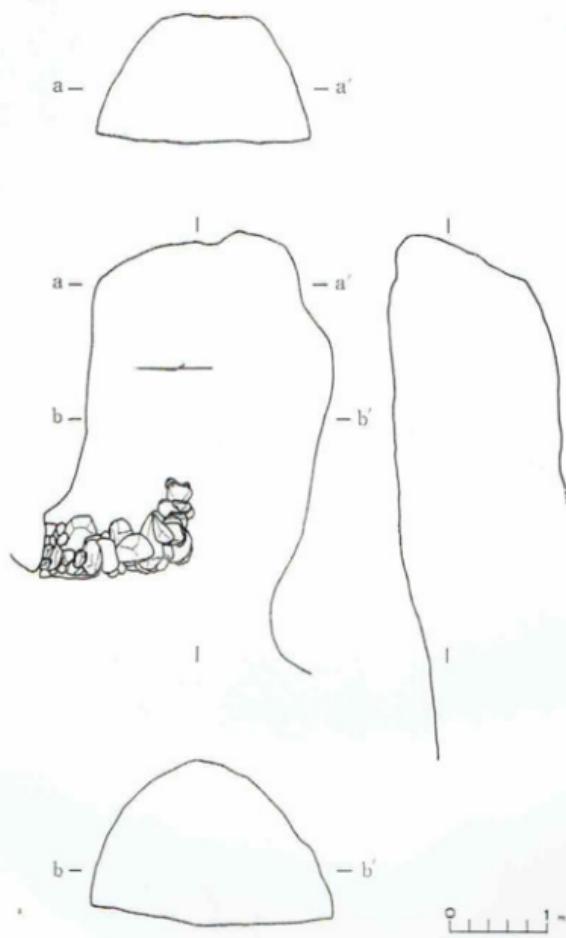
○印 A地区(今回の発掘調査地点) ×印 B地点



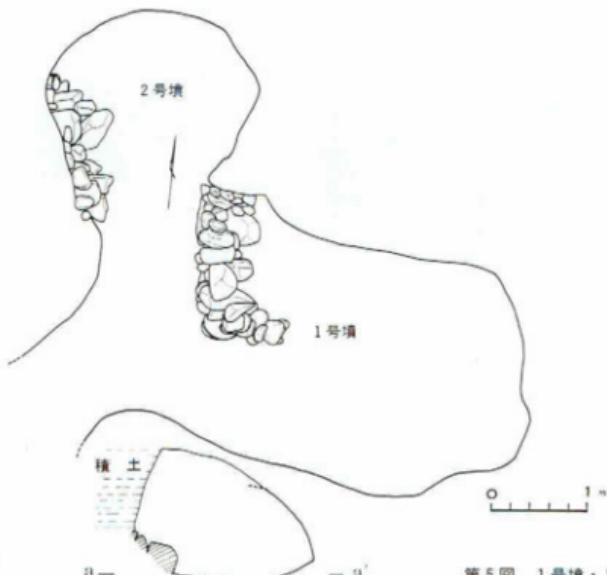
第2図 塚沢横穴古墳群付近地形図



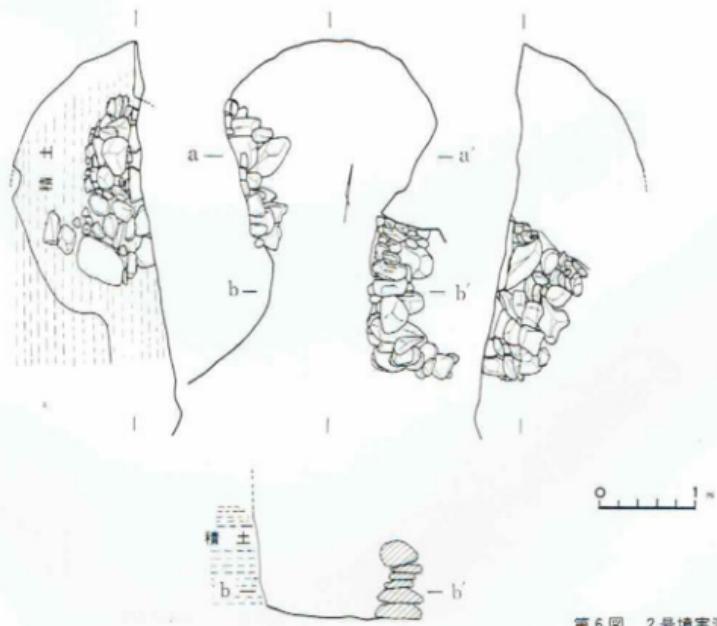
第3図 横穴古墳の配置図



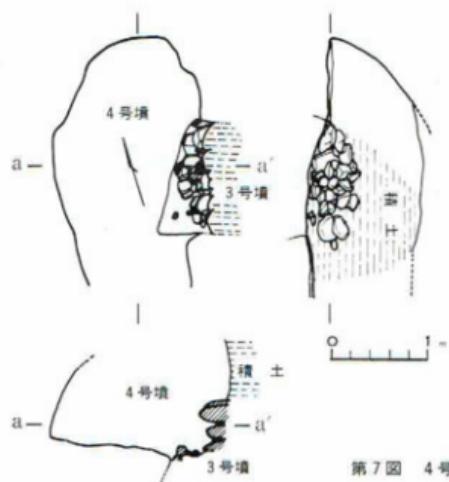
第4図 1号墳実測図



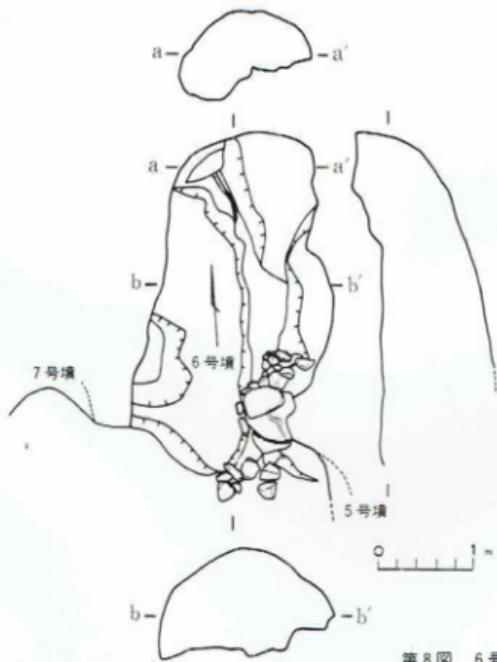
第5図 1号墳・2号墳実測図



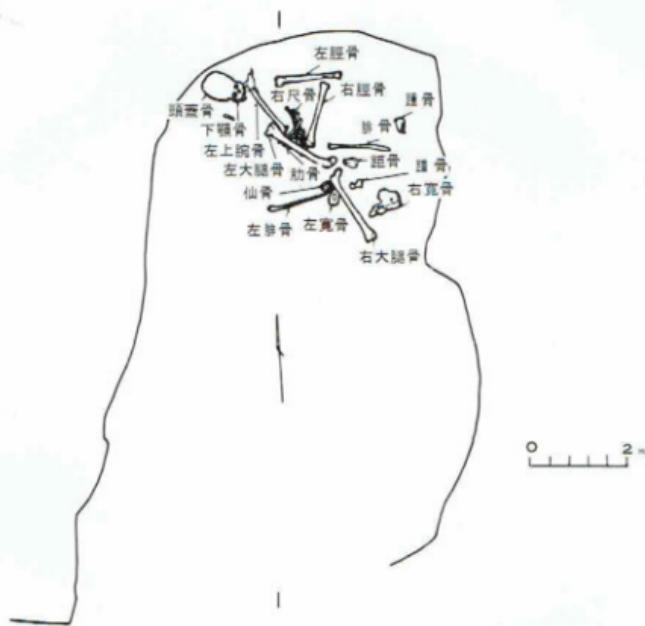
第6図 2号墳実測図



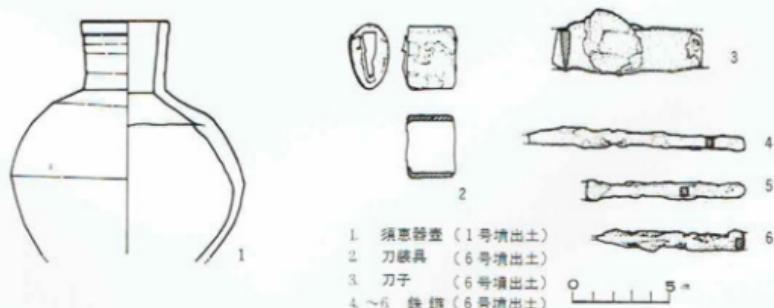
第7図 4号填実測図



第8図 6号填実測図



第9図 6号墳人骨出土状況実測図



第10図 出土遺物実測図

図 版



図版1 塚沢横穴古墳群付近空中写真 国土地理院承認番号（昭和51 東複第122号）TO-73-3 X C2-29
イ 塚沢横穴古墳群A地区（発掘箇所） ■ B地区 ハ 月立小・中学校



調査前
(居宅の後の崖斜面に
横穴古墳群がある)



調査後
(居宅は調査後移転)

図版2 塚沢横穴古墳群の立地 (○印内)

塚沢横穴古墳群全景



1号墳（右）と2号墳（左）



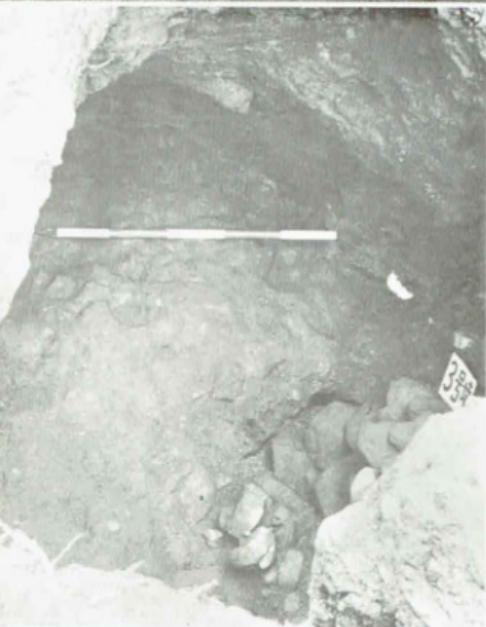
1号墳（右）・2号墳（中）
3号墳（左）



図版3 横穴古墳の状況（その1）



4号墳の側壁積石と
3号墳



4号墳



5号墳と7号墳(手前)

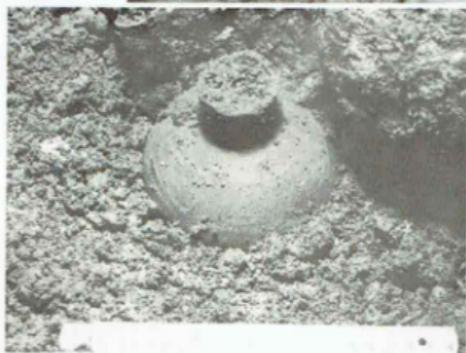
図版4 横穴古墳の状況(その2)



6号填玄室



6号填人骨出土状況

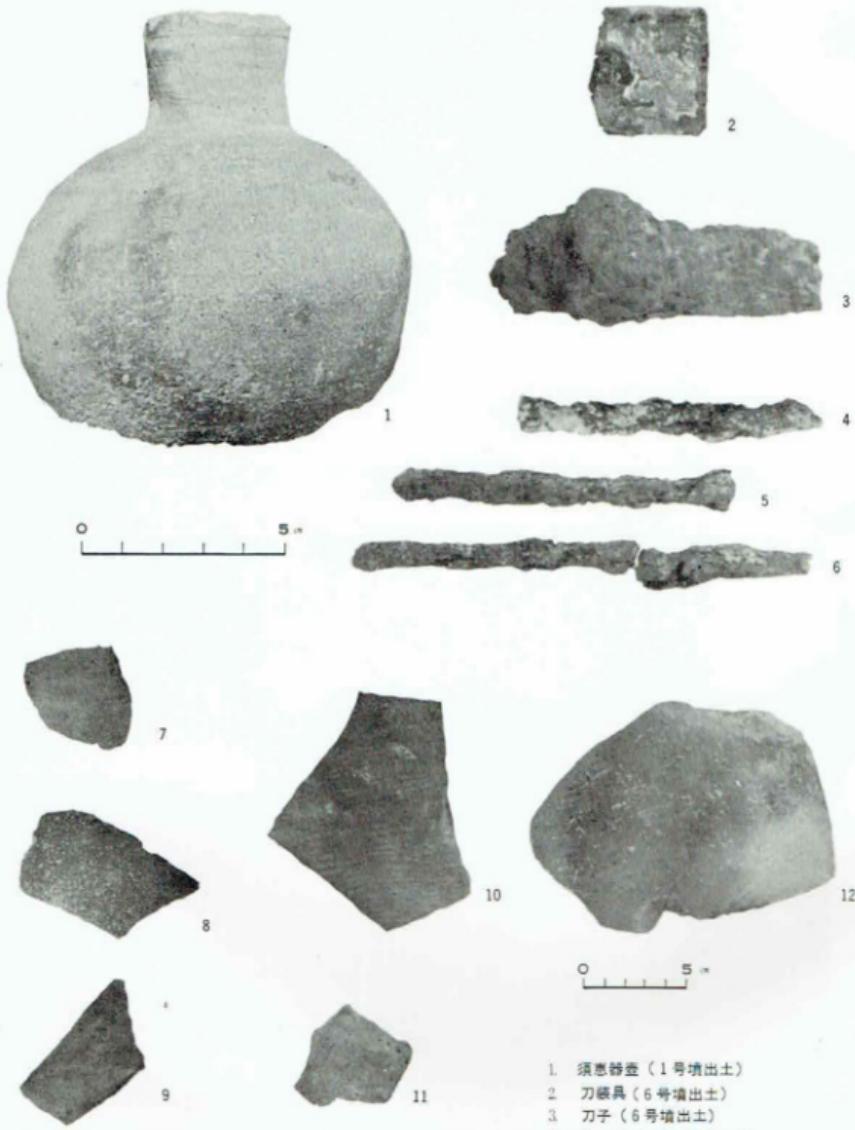


1号填須恵器出土状況



6号填鐵錐出土状況

図版5 横穴古墳および人骨・遺物出土状況



圖版 6 出土遺物

1. 須惠器壺 (1号墳出土)
2. 刀裝具 (6号墳出土)
3. 刀子 (6号墳出土)
- 4~6. 鐵 鏊 (6号墳出土)
7. 9. 12. 須惠器破片 (6号墳出土)
8. 10. 須惠器破片 (1号墳出土)
11. 土師器壺破片 (6号墳出土)

宮城県氣仙沼市文化財調査報告書

塚沢横穴古墳群

昭和51年3月20日 印刷

昭和51年3月24日 発行

発行 気仙沼市教育委員会

宮城県氣仙沼市八日町一丁目1番1号

〒988 TEL(2)6600 約

印刷 大気ジャーナル社

気仙沼市古町二丁目1番15号 TEL(2)0532